

令和 6 年 5 月 30 日現在

機関番号：12606

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2023

課題番号：19K00171

研究課題名(和文) 倭館を介した朝鮮王朝における日本陶磁の受容とその影響

研究課題名(英文) Reception and influence of Japanese potteries in the Joseon dynasty mediated by Wakan

研究代表者

片山 まび (KATAYAMA, MABI)

東京藝術大学・美術学部・教授

研究者番号：80393312

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：草梁倭館に関連する陶磁器研究は文献が主とされ、考古学・美術史研究は乏しい状況にあった。申請者は平成30年に釜山博物館文化財調査チームとともに船滄付近の一角を調査、多数の日本陶磁や倭館窯の陶片を発見し、まず考古学の手法により報告書を完成した。次に倭館での陶磁器交易の実態について、文献研究の成果にもとづき訳官の仲介的な役割について明らかとした。最後に美術史の手法により、朝鮮青花の様式は清朝磁器と日本陶磁と朝鮮王朝の嗜好が「交錯」するなかで醸成され、日本陶磁からの「影響」という言葉では語りきれないことを明らかとした。このほか訳官が注文に関わった判事茶碗と朝鮮地方窯への影響について指摘した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

研究成果の学術的意義：倭館の考古学調査報告の完成、により記録でのみ知られていた倭館における対馬人の暮らしを明らかとしたこと、対馬-倭館-漢陽(現在・ソウル)と連なる日本陶磁の流通を解明したこと、において訳官の役割と重要性を指摘したこと、朝鮮時代の青花はにより流入した日本陶磁の影響のみならず、朝鮮王朝の嗜好や清朝磁器の影響など複合的な背景を持つこと、倭館での陶磁器生産が地方窯にも影響を及ぼしたこと。研究の社会的意義：倭館を経由して大量な日本の文物が朝鮮王朝に流入していることを証明し、韓国の有力紙である『東亜日報』からの取材を受けるなど、市民にも知識を還元することができた。

研究成果の概要(英文)：Research on pottries related to the Waegwan has been based mainly on historical documents, with little archaeological or art historical research being conducted. In 2008, I surveyed a corner of the Seonchang area with the Busan Museum, and discovered a large quantity of Japanese ceramics and pottery shards from the Waegwan kiln. In this research, I completed a report on Seonchang area site using archaeological methods. Next, based on the results of the historical documents survey, the intermediary role of the Yakkan(Joseon dynasty translators) were clarified in the pottery trade. Finally, using art history methods, the study clarified that the Joseon blue-and-white style was fostered by a "mixture" of Qing dynasty porcelain, Japanese ceramics, and the tastes of the Joseon dynasty, and cannot be described by the simple term "influence" of Japanese ceramics. Also, I pointed out the influence of local Joseon kilns on the Hansu tea bowls that Yakkan was involved in ordering.

研究分野：美術史

キーワード：倭館 陶磁器 朝鮮 肥前磁器

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

申請者は平成 21～24 年度の科学研究費（基盤研究）の助成により、17 世紀から 18 世紀にかけて対馬藩が朝鮮半島に置いた外交施設である倭館内に設けられた窯（倭館窯）で焼かれた、いわゆる御本茶碗を取り上げた。本研究では、倭館窯では日朝双方の技術と様式が取り込まれたこと、二国間の技術と様式の併用こそが「高麗茶碗」の新様式を生みだすうえで重要な役割を果たしたことが明かとした。

このような新知見が得られるなかで、17～18 世紀にかけて日本陶磁のなかで御本茶碗の模倣とされるもの、すなわち「写し」の問題を扱う必要が生じてきた。従来の研究では、御本茶碗の「写し」は、言葉どおり朝鮮陶磁から日本陶磁への影響という一方向しか考えられてこなかった。しかし倭館窯出土片が物語る事実は、むしろ朝鮮陶磁と、諸大名の好みやその御用窯が双方向に影響を与えつつ新様式を生んでいる可能性であり、平成 25～30 年度の科研では、日本陶磁における「高麗茶碗」写しについて、各地の窯の影響関係を明らかとした。

以上の研究を踏まえ、このたびの研究期間においては、対日本というベクトルとは逆に、対朝鮮というベクトルを検討するため、倭館を通じて朝鮮国内にもたらされた日本陶磁が朝鮮陶磁に及ぼした影響を考察しようとした。

2. 研究の目的

本研究の目的は、倭館における日本陶磁、もしくは日本人が好んだ中国陶磁の受容背景と影響を具体的に明らかにすることにより、今まで日本か韓国のどちらか一方からの視点で語られることが多かった韓国陶磁史について、日韓の双方向的な視点からの解釈を目指すことにある。韓国においても、工芸史研究を多文化の枠組みのなかで新たに構築すべきことが提言されており、本研究はそうした新たな韓国工芸史研究の動向にも寄与することを目的とする。本研究の意義は、昨今、多文化的視点から語られはじめた韓国工芸史研究によりいっそう具体的な成果を提供し、両国の陶磁器の相互理解に寄与することに求められる。

3. 研究の方法

研究の方法は、申請当初から 2019 年度までは 考古学的なアプローチ：申請段階で釜山博物館文化財調査チームとともに発見した草梁倭館船滄跡周辺遺跡の出土遺物についての整理・報告作業、 美術史的なアプローチ： にもとづいた官窯や地方窯の陶磁器との比較の 2 点を考えて進めていた。しかし、コロナ禍にあって渡韓が困難となり、 の作業に大きな支障が生じたため、2020 年度より、池内敏先生を代表とする訳官使・通信使とその周辺研究会、科研の共同研究者となり、 文献史学からのアプローチについて学ぶこととした。

4. 研究成果

研究成果は、考古学的な成果、美術史的な成果の二つに分けられる。

(1) 考古学的な研究成果

草梁倭館船滄跡周辺遺跡についての整理作業を実施し、報告書を完成した。本調査は史料研究が中心であった倭館研究において、ほぼ初めてとなる本格的な草梁倭館に対する考古学的な調査であり、多数の日本陶磁が出土した。出土品の組成は、肥前陶磁の碗皿、朝鮮施釉陶器の壺や瓶、倭館窯などからなる。肥前陶磁の碗皿のほとんどは対馬の人々が倭館での日常品として細物請負屋を通じて入手したもの、朝鮮施釉陶器の壺や瓶は、酒や調味料などの容器として贈答品や開市として倭館に持ち込まれたもの、倭館窯は館内の工事に伴う土の移動によって船滄跡付近

にまで流入したことを明らかとした。(片山まび「科学研究報告書・基盤研究(C)倭館を介在した朝鮮王朝における日本陶磁の受容とその影響 草梁倭館 船滄址 周辺遺蹟 報告書-부산 중구 동광동 1가 6-1 외 2 필지 유적-」;「土のなかの草梁倭館-船滄址周辺遺蹟調査概要報告」『訳官使・通信使とその周辺』8号、訳官使・通信使とその周辺研究会、2023) 本研究成果は、論文のほか 2024年3月に韓日関係史研究会で発表し、『東亜日報』2024年3月15日に関連記事が掲載され、一般にも新知見を広く公開することができた。

(2) 美術史的な研究成果

船滄跡周辺遺蹟では、いわゆる御本立鶴手の一部と見られる破片が出土し、この破片を中心に御本立鶴茶碗に関する成立背景を考察した。まず御本立鶴手茶碗の形式は、徳川二代三代将軍において好まれた割高台や狂言袴などの高麗茶碗の形式を踏まえているとした。文様については高麗時代の象嵌青磁に表された鶴文とは異なり、むしろ牧谿の鶴の図様に連なる系譜であることを示した。言うまでもなく大徳寺所蔵の「観音猿鶴図」は近世絵画の手本ともされてきたが、狩野派はもちろん、家光につらなる将軍の手による鶴図においても好まれた図様であることを示した。様式的には日本陶磁(もしくは日本で解釈された高麗・朝鮮陶磁)の範疇に入るが、他方でその技術は朝鮮地方窯と深い関わりを示し、朝鮮陶磁の一部とも言える。こうした日朝の周縁において生じた様式に着目することが日韓陶磁史の双方に求められることを述べた。(拙稿「倭館窯에서 제작된 ‘立鶴文(타치즈루) 양식’ 茶碗의 성립 과정」『미술사연구』113, 한국미술사학회, 2021)

倭館に流入した日本陶磁の一部は朝鮮国内に流通し、朝鮮後期の官窯青花に「影響」を与えたことが指摘されてきた。船滄跡遺蹟を整理することにより、漢陽の都まで日本陶磁がたどり着くまでの経路が明らかとなった。朝鮮後期の青花をつぶさに見ると、単なる日本陶磁の「影響」や模倣ではなく、自らの好みによって変化を加え、さらには清朝磁器などとの「交錯」が見られることを示した。(拙稿「동아세아 시각에서 본 조선백자」『조선의 백자, 군자지향』サムスン Leeum 美術館、2023)

日本陶磁と朝鮮陶磁との「交錯」が、官窯のみではなく、地方窯にも及んだことについて、判事茶碗の定義とその窯址出土品を中心に探った。小堀遠州が好んだとされる井戸茶碗の形式は倭館窯、さらには倭館窯で働いた朝鮮沙器匠により慶尚南道の地方窯に波及した。御本(見本)のない判事茶碗は、地方窯の碗型式と「交錯」しつつ、独自の姿を作り上げていった様を明らかとした。(「抜荷と贈答品の中身 「判事茶碗」の生産と終焉をめぐって」東アジア日本研究者協議会第5回国際学術大会、2021; 拙稿「判事茶碗」に関する一考察」『訳官使・通信使とその周辺』5号、訳官使・通信使とその周辺研究会、2022)

倭館窯の成立背景について、従来の研究では日本側の背景のみが強調されてきたが、朝鮮側の思惑について考察した。朝鮮側としても対馬側の要求を唯々諾々と受け入れたわけではなく、自らの監視下に置くため、官窯制度をもととして燃料や原料、技術者を派遣する倭館窯の制度を設計した可能性を指摘した。(「寛永年間の「御本茶碗」・「倭館窯」の成立背景に関する一考察」茶の湯文化学会、2023)

以上の研究により、当初の目的どおり、日本、もしくは韓国側のいずれか一方向からの視点のみで語られることが多かった17世紀から18世紀にかけての朝鮮陶磁について、双方向の視点からその性格について明らかにすることができた。また官窯が中心の朝鮮時代の陶磁史研究に対して、実はグローバルな展開をした慶尚南道地方の地方窯についてクローズアップすることができた。研究成果については、展覧会や新聞記事などを通じて、多くの市民に還元することができた。ここに詳らかにできないが、多くの先生方のご教示とご協力に深謝を申し上げたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 片山まび	4. 巻 8
2. 論文標題 土のなかの草梁倭館－船滄址周辺遺跡調査概要報告	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 訳官使・通信使とその周辺	6. 最初と最後の頁 29－53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 片山まび	4. 巻 5
2. 論文標題 「判事茶碗」に関する一考察	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 訳官使・通信使とその周辺	6. 最初と最後の頁 35 - 56
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 片山まび	4. 巻 0
2. 論文標題 東アジア視覚からみた朝鮮白磁	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 朝鮮の白磁 君子志向	6. 最初と最後の頁 411 - 425
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 片山まび	4. 巻 113
2. 論文標題 倭館窯で製作された御本立鶴様式の成立過程に関する考察	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 美術史学研究	6. 最初と最後の頁 151～182
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 片山まび	4. 巻 -
2. 論文標題 対馬口と日本人ー草梁倭館船滄周辺遺跡出土遺物にみる対馬人の暮らし	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 近世国家境界域「四つの口」における物質流通の比較考古学的研究	6. 最初と最後の頁 117 - 124
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 片山まび	4. 巻 91
2. 論文標題 齊浦倭館と草梁倭館の発掘調査	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 東洋陶磁学会会報	6. 最初と最後の頁 4 - 5
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 片山まび	4. 巻 0
2. 論文標題 茶碗からみる朝日交流ー粉青沙器様式から倭館窯までー	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 朝鮮陶磁、肥前の色をまとう	6. 最初と最後の頁 182 - 191
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件 (うち招待講演 4件 / うち国際学会 3件)

1. 発表者名 片山まび
2. 発表標題 寛永年間の「御本茶碗」・「倭館窯」の成立背景に関する一考察
3. 学会等名 茶の湯文化学会シンポジウム (招待講演)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 片山まび
2. 発表標題 抜荷と贈答品の中身－「判事茶碗」の生産と終焉をめぐる－
3. 学会等名 東アジア日本研究者協議会第5回国際学術大会（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 片山まび
2. 発表標題 草梁倭館船滄址周辺遺跡について
3. 学会等名 韓日関係史学会（国際学会）
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 片山まび
2. 発表標題 考古学からみた草梁倭館－船滄周辺遺跡の調査概要と課題
3. 学会等名 第17回「訳官使・通信使とその周辺」研究会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 片山まび
2. 発表標題 外国人がみた朝鮮白磁
3. 学会等名 Leeum美術館（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 片山まび
2. 発表標題 韓国における新たな発掘成果
3. 学会等名 東洋陶磁学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 片山まび
2. 発表標題 倭館と陶磁器
3. 学会等名 韓国国立晋州博物館（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 片山まび
2. 発表標題 草梁倭館内の日本人の暮らし
3. 学会等名 土のなかから発見した釜山の歴史 釜山博物館（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 片山まび、砂澤祐子、黒田草臣	4. 発行年 2019年
2. 出版社 阿部出版	5. 総ページ数 156
3. 書名 高麗茶碗 井戸・粉引・三島	

〔産業財産権〕

〔その他〕

東亜日報、筆者の倭館調査について2024年3月15日取材記事

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------